日本社会心理学会会報

206 号

発行　日本社会心理学会　http://www.socialpsychology.jp/
編集・制作　広報委員会（担当常任理事：三浦麻子）

2015 年 6 月 25 日

第 28 期役員あいさつ

会報 205 号で既報のとおり，2015 年 4 月より第 28 期体制が発足しました。村田光二会長と 6 名の常任理事から会員の皆様へ，学会全体および諸活動の今後の里程を含めたごあいさつを申し上げます。

二度目の会長就任あいさつ

村田光二

昨年度中の役員選挙で日本社会心理学会の会長に再び選出され，これから2年間の任期を務めさせていただくことになりました。諸先輩，会員諸氏の継続的な活動によって本学会は現在に至っていますが，今後のさらなる発展を期して，微力ながら会長としての役割を後2年間果たしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

二年前の繰り返しですが，良い研究を生む出す仕組みとしての社会心理学会を目指していきたいと考えています。特に，学会運営を担う層に少しずつ若手も加わる形で世代間の連携を取りながら，持続可能な仕組み作りを目指したいと思います。二年前に比べて，少子化や国の財政逼迫の影響を受けて，大学や研究者を取り巻く環境がより厳しいものになっていると感じます。これらに抗しながら，研究への意欲を維持高揚できる仕組みを，社会心理学会として構築したいと思います。

私は前期に，新規事業委員会を創設して，春の方法論セミナーを昨年と今年の2回，夏の合宿企画を昨年夏に行いました。多くの中堅，若手メンバーに協力していただいて，これまでと違ったタイプの企画を実現できたと考えています。新たなメンバーを加えた二期目の新規事業委員会にその仕事をお任せして，後方からの支援を続けます。会員の方々が，自身の研究活動を推進する機会として利用していただけるとありがたいですし，学会活動と学会運営にコミットできる機会になることも望みます。また，前期には，浦委員長を中心にとした編集委員会関係者の皆さまのご尽力によって，『社会心理学研究』の内容や編集システムが改善されました。審査期間も短縮されました。引き続き，（日本語）学術雑誌としてさらに上の水準を目指して，刊行を継続したいと思います。

他方で，学会大会の主催が難しい状況を打開できていません。幅広い方々に少しずつ負担してもらう形で，何とか将来につなげていきたいと思います。また，学会の選挙の投票率が低いという問題も未解決です。投票を通じても，学会活動への参加をお願いします。今後とも，会員の皆さまには良い研究を行ってアカデミック世界やグローバル社会にアピールしていただくとともに，学会にも力を結集していただけると幸いです。さらに2年間，どうぞよろしくお願いします。

（むらた　こうじ・一橋大学）

事務局担当

藤島喜嗣

このたび事務局を担当することとなりました。1,800 名を超える会員がいる団体を円滑に運営できるか不安がありますが，誠心誠意つとめさせていただきます。よろしくお願いいたします。

事務局業務は多くが外部委託されています。委託先である国際文献社，特に本学会担当の古川佳奈さんには就任前から大変お世話になっています。年度初めで各種業務をこなさなければならないこの数ヶ月をなんとか過ごせたのは彼女のおかげです。今後はその負担を軽減できるように私の方でも努力します。また，事務局幹事を一橋大学大学院の津村健太さんにお願いしました。彼自身多忙な毎日を送っているのですが，無理をお願いしました。せめてもの罪滅ぼし(?) として，彼には学会の現状とその将来構想を見ていただき，次世代を担う糧にしてもらおうと考えています。

引き継ぎに際して前任である岡隆先生に大変お世話になりました。これまで十数箱におよぶ事務局長保管の紙資料が存在したのですが，全て電子化した上で，適正な確認手続きを経て全て廃棄処分してくださいました。過去資料の検索可能性があがったことで前例，先例の確認が容易になりました。とても助かります。また，事務局業務も非常に簡潔なマニュアルにまとめてくださいました。これらの資料を駆使し，「影の事務局長」をお願いすることがないよう努力します。

事務局業務は多岐にわたりますが，それらの業務で目指すことが二つあります。一つは「整理」です。本学会は運営体制のスリム化を実現していますが，それでも整理すべき点があります。前期常任理事会より引き継いだことでもありますが，外部保管されている紙資料の整理，表現や形式が統一されていない学会諸規定の整理，明文化されていない申し合わせ事項を整理して必要な物を規定化する，過去の制度で形骸化してい

るもの，例えば特別会計などの整理，名簿刊行の整理，様々な整理が必要です。これらを整理することで，心理学の趨勢に即応できる体制を作ることができるのではと考えています。

もう一つは「透明性」です。本学会は，社会心理学と社会心理学会に精通する先生方が何期も運営に携わることで円滑な運営をしてきました。同時に，属人主義による過重負担を生んできました。学会に精通していなくても学会運営できる仕組みを作る必要があります。そのためには，本学会が行っていること，特に執行部が行っていることをさらに可視化することが有効だと考えます。前段でもあげた諸規定の整理はここにも関わりますし，現在でも十分ではありますが会計管理のさらなる透明化もあってよいと思います。本学会は，多くの会員を抱え予算規模も小さくない学会です。それゆえ大人な対応が求められますが，多少子供っぽくても運営できる学会になればいいなあと感じています。

大きく構えてしまいましたが，まずは円滑な事務局業務を実現します。よろしくお願いいたします。　　**（ふじしま　よしつぐ・昭和女子大学）**

編集担当

沼崎誠

第28期の編集担当常任理事をさせていただくことになりました沼崎誠（首都大学東京）です。『社会心理学研究』の編集業務全般と学会賞の選考が主な業務となります。編集業務は，別の学会からの横滑りで，ある程度把握しているつもりでいましたが，『社会心理学研究』への投稿数が多くもうすでにアップアップの状態になってしまっています。これから 2 年間無事に業務を遂行できるか不安を感じているところではありますが，幸い，副編集委員長には大沼進先生（北海道大学）にお願いをすることができ，学会の第一線で活躍されている優れた編集委員の先生方とともに編集委員会を構成することができました。編集幹事の武田美亜さん（青山学院女子短期大学）および編集事務局の川久保好恵さん（国際文献社）とともに，優れた研究を発信できる雑誌にしていきたいと考えています。

前任者の浦先生は，この会報での「常任理事就任挨拶」で自分自身に課すミッションを挙げられ（会報 198 号をご覧ください），デスク・リジェクション制度の導入や主査の匿名化などの改革を行い，ミッションを実現されました。このようなことは，私にはとうていできないことですので，今期におきましては，これらの改革の成果について検証するとともに，引き続き，審査の質を向上させつつ，審査の編集期間の短縮と編集作業の効率化ができるシステムの構築を目指していきたいと考えています。

こちらも前任者からの引き継ぎ事項ですが，今期においては，他の担当常任理事の先生方と協力をして，J-Stage での『社会心理学研究』の公開を軌道に乗せたいと考えています。すでに昨年度の発行の 30 巻（の一部の号）については J-Stage で公開をされていますが，今期の内に少なくとも紙媒体の発行と同時に公開できるようにシステムを作りたいと思います，また，紙媒体よりも早い段階での早期公開といったことも視野に入れて検討を進めて行きたいと思います。

優れたジャーナルに向けた投稿論文の審査は，編集委員の先生方だけではなく，審査員として，また，最も重要なこととして投稿者として会員の皆さまにもご協力をいただかなくてはなりません。審査の中での改稿は原則として 3 回までとして，この改稿の中で掲載可/掲載不可を決定するようにしています（審査規程をご参照下さい）。投稿者としても審査者としても，このシステムをご理解いただき，投稿者と審査者の共同作業の中でよりよい論文になるようにしていただきたいと思います。審査の過程の中では厳しいコメントもあり，苛立つこともあるかもしれません。しかし，審査者のコメントに対応していく中での分析や議論の洗練によって，よりよい論文となるとともに，次の研究への示唆が得られることになると思います。会員の皆さまの積極的な投稿をお待ちしています。　　**（ぬまざき　まこと・首都大学東京）**

渉外担当

唐沢穣

渉外部門を担当することになりました唐沢（名古屋大学）です。25 期で学会活動，26 期では編集のお仕事をさせていただきましたので，今期で 3 回目ということになります。お引き受けする際に村田会長からは，「学会全体にわたって若い世代の皆さんが活躍できる組織を目指したい。当然，常任理事会も。」という趣旨とともに「そうは言っても常任理事の中に少しくらいのベテランも必要」という意味合いを込めたコメント（ただし，詳細な文言は全く異なっていたように思いますので私の勝手な解釈が多分に入っていますが）をいただきました。実際，ここ数年の社会心理学会の活動を振り返りますと，たとえば各種委員会の顔ぶれなどに，学会の若返りが順調に進んでいることが見て取れるように思えます。一方，若い人ばかりが仕事でコキ使われているといった組織になってはならないことは，言うまでもありません。私自身は，まだまだベテランだなどという自覚はありませんので，心構えはフレッシュに，しかし私のこれまでの経験が何らかの形で学会活動に貢献できるのであればという願いももちながら，任務にあたっていくつもりでおります。

さて，会報上に一年おきに設けられる本欄を何度もお読みになった方もおられるかもしれませんが，改めまして，渉外担当の主な役目のひとつに，大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度にかかわる選考の作業があります。本年度も，つい先日この作業を終えたばかりです。数年前までは大学院生だけが支援対象であったのに加え，近年では学位取得者にも範囲を広げて，若手研究者の皆さんが国際的な活動を始められるきっかけを提供する役目を，この制度は果たしてきました。これをさらに意義ある制度するために，もし問題点があるならそれらを精査し，改善すべきところは改めながら，会員の皆さんをより実質的にサポートできるものにしていきたいと考えています。

もう一つの重要な任務は，日本心理学諸学会連合などを通じた他の学会，機関とのコミュニケーション役です。特に来年 2016 年の夏には，International Congress of Psychology, International Association for Cross-Cultural Psychology といった社会心理学と関連の深い国際学会大会が，連続して日本で開催されます。日本社会心理学会としても，これらの大会にどのような貢献できるのか，その方法や内容について，会長や他の理

事の皆さんとさらに議論を深めていきます。

社会心理学という分野は，ほぼ必然的に，他の様々な研究分野との交流や協働を行う機会に恵まれています。その学際性が，この日本社会心理学会の活動においても大いに発揮されるような状況を創り出していく作業の一端を担えればと願っております。会員の皆様からも，「渉外担当」の仕事を必要とするような新しくてユニークなアイディアを，私あてにどしどしご提案ください。どうぞよろしくお願いいたします。

（からさわ　みのる・名古屋大学）

学会活動担当

山口裕幸

今期，学会活動を担当することになりました山口裕幸です。具体的には，年1回の公開シンポジウム開催のお世話をすることと，若手研究者奨励賞を募集・選考して授与することの2つが大きな柱となります。

前任者の相川充先生からきれいに整理された引き継ぎ書類のファイル一式をお届けいただき，「こんなにきちんとやれるかなぁ～」という不安の方が先立ちました。すべからく大雑把にことに当たって来た人間としては，荷が勝ちすぎた役割ですが，村田会長はじめ常任理事・理事の方々のご協力も得ながら，なんとか会員の皆様のお役に立てるようにやって行こうと思います。

引き継ぎから約2ヶ月が経過したばかりですが，公開シンポジウムに関しては，すでに 6 月 6 日に第 59 回が開催されました。今回は，福島大学の飛田操先生に企画していただき，開催責任者をお務めいただいて，福島駅に隣接するコラッセふくしまの多目的ホールにて「被災地の明日を探る社会心理学–福島からの提言」というテーマで開催されました。飛田先生の司会進行のもと，原発事故災害からの復興をテーマに水田惠三先生，災害救援者のストレスとそのケアをテーマに松井豊先生，原発被災地の生産物に対する消費者の態度をテーマに三浦麻子先生の，3名のシンポジストに話題提供をしていただき，フロアからの質問を受けて，質疑応答が行われました。現実の社会問題と向き合う社会心理学的取り組みが多様になされ，また問題解決に向けて貢献していることを間近に知ることができたシンポジウムでした。このシンポジウムのようすは，広報担当常任理事の三浦麻子先生のご尽力によって，学会ホームページに掲載された動画を通しても知ることができます（http://www.socialpsychology.jp/sympo/59.html）。参加できなかった方で，関心のある会員の方は，是非，ご覧ください。

来年度の第 60 回シンポジウムについては，富山大学の黒川光流先生のご協力をいただけることになりました。国際心理学会議（ICP）の開催等で，初夏の季節は慌ただしくなりそうですので，落ち着いてくる秋以降の開催となる見込みです。テーマについても一般の皆様に社会心理学に関心を持っていただけるシンポジウムにすべく，鋭意検討中です。新幹線が開通し交通アクセスも格段に便利になった富山で，紅葉の立山連峰を眺める季節に集まる機会になればと思っています。公開シンポジウムのテーマや開催地について，ご意見やアイディアをお持ちの方は，ぜひともお寄せください。

もう1つの大切な役割である，若手研究者奨励賞の募集・選考・授与の活動も始まります。この賞は，本学会に所蔵する若手研究者（30 歳以下，あるいは大学院の課程に在籍している方）の研究活動を支援する目的で創設されたものです。賞金は 10 万円です。若干少ないのではないかというご意見も耳にしますが，なにぶん，使途は自由（領収書の提出も求められません）ですので，研究費は獲得したけれど，コンプライアンスの関係で使途が制限されていて使いづらい，等と感じておられる方には朗報だと思います。夏の終わりには募集を開始しますので，ふるってご応募ください。

会員の皆さんの研究や交流が豊かなものになるようなお手伝いができればと考えております。至らない点が多いと思いますが，ご協力を賜りますよう，よろしくお願い申し上げます。

（やまぐち　ひろゆき・九州大学）

広報担当

三浦麻子

このたび常任理事として広報担当を拝命しました。常任理事という役職に就いたのは人生初で，何かと勝手がわからず右往左往しております。諸先輩方の足手まといにならぬよう努めます。しかし幸い担当が広報ということで，こちらは当学会では通算 4 期目。川浦康至先生のもと広報委員会が発足した当時からのメンバーですので，勝手知ったる仕事です。後述するように広報の仕事範囲は多岐にわたりますが，亀の甲より年の功と申しますか，お陰様で少なくとも現状は全て把握できております。

しかしだからといって「流して」できるような内容ではなく，常に「動いている」ことが求められるのが学会広報という仕事だと理解しています。しかも，その善し悪しは別として，いかなる学問にもダイレクトな「社会的有用性」が求められる昨今，社会心理学会としても手をこまねいてはいられません。学会というコミュニティ内部の風通しをよくするお手伝いをすることはずっと変わらず大切ですが，広く社会に向けた情報発信をどのように展開するか。私の個人的なアイディアの一部は以前会報 200 号にも書かせていただきましたが，いまだ試行錯誤の毎日です。しかし，今この時代に，社会心理学の発展と普及という壮大な社会実験のデザインを考え，実践し，リアクションデータを収集できる立場にあるというのは，No Data, No Life な私にとってたいへん愉快なことでもあります。

時機を得た柔軟な，フットワークの軽い活動が必要な仕事なので，これから 2 年間共に仕事をする委員には「アイディア豊かで，なおかつそれを遠慮なく提案してくださりそうな方」を厳選しました。杉浦淳吉さん（慶應義塾大学），清水裕士さん（関西学院大学），尾崎由佳さん（東洋大学），縄田健悟さん（九州大学）の 4 名です。各委員は次号から「責任編集コンテンツ」を担当します。ここで，会報という媒体による，学会の活性化と「外

向け」広報に関するそれぞれなりの試みを形にしていただきます。

アクティブに学界の最新情報をお伝えするソーシャルメディア（Twitter, Facebook），学会のエンサイクロペディアとしての学会 Web サイト，そして学会活動を着実に記録し歴史を刻む会報，それぞれの特徴を活かしかつ連携させながら「攻め」の姿勢で挑むつもりです。言うまでもなく，これらの活動は会員諸氏のお力添えがなければ成り立ちません。どうかよろしくお願いします。

（みうら　あさこ・関西学院大学）

大会運営担当

坂田桐子

この度，大会運営担当を務めさせていただくことになりました。年次大会は学会の活動の中でも極めて重要な位置を占める行事ですが，参加者数が 600 名を超える大規模な大会であるため，開催校に大きな負担がかかってしまうという問題があります。大会開催校の負担をできるだけ軽減し，大会開催校が目指す大会を開催できるよう，効果的なサポートを提供することが大会運営委員会の主なミッションであると認識しております。大会の準備や運営の手順は，ある程度マニュアル化できる部分もありますが，大会開催校のご事情やビジョンに応じてその都度変わる部分も多々あります。また，予想できない問題が生じることも少なくありません。そのため，大会運営のサポート体制には「臨機応変さ」と「柔軟性」が求められると考えております。できる限り柔軟かつ臨機応変に，大会開催校のご要望に応えられるよう，努めてまいります。なお，大会運営担当のもう一つの重要なミッションは，平成 29 年度以降の大会開催校を決定することにありますので，会員の皆様に個別にご相談やお願いをさせていただくことがあるかもしれません。その際は，できるだけ前向きにご対応いただければ幸いです。

私自身は就任したばかりということもあり，まだ勝手がわからず右往左往している状態なのですが，幸いにも，大会運営委員会には，前期から担当しておられる頼もしいメンバーがいらっしゃいます。元吉忠寛先生（関西大学），大沼進先生（北海道大学），片桐恵子先生・石井敬子先生（神戸大学）です。また，今期から新たに樋口匡貴先生（上智大学）にも加わっていただきました。大会準備委員会関係者としては，今年度（第 56 回）開催校の工藤恵理子先生・唐澤真弓先生（東京女子大学）のほか，第 57 回開催校の三浦麻子先生・稲増一憲先生（関西学院大学）にもご参加いただいております。大会運営幹事を古川善也さん（広島大学大学院博士課程後期）にお願いし，総勢 11 名で年次大会の開催に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（さかた　きりこ・広島大学）

新規事業担当

竹澤正哲

記憶の美化もあるだろう。私が大学院生だった 20 世紀最後の数年間，日本社会心理学会には江戸っ子の華々しい喧嘩を見物するような楽しさがあった。多くの先生方が社会心理学の現状を危惧し，社会心理学のあるべき姿，向かうべき方向を巡って議論し，衝突していた。最も興奮したのは，ある理論が論理的に成立し得ないことを数理モデルを用いて証明した発表に対し，その理論を提唱された先生が挙手。「私の理論は現代数学では表現できない」と発言し，発表者との間で激しいやりとりが繰り広げられた瞬間である。詳細は失念したが，学会政治を巡り怪文書が飛び交ったこともあった。大学入試でカンニングを発見すると，その直後の試験監督控室には，獲物を仕留めたかのような高揚感が漂うという。この話を聞いた時，なぜかそれと良く似た興奮を覚えた。

筆が滑ってきたが，要するに見るものを興奮させる出来事が多かったということである。それから十数年が経ち，そうした激しい議論は減少した。論争好きな全共闘世代の先生方が定年を迎えたことも関係しているだろうが，学会が成熟し，そのあるべき姿を議論する需要がなくなったことも大きい。事実，会員数は増加し，心理界隈では屈指の規模を誇る学会へと成長した。会員による国際誌への投稿も当たり前となった。世界的にも，社会心理学者の論文が Science や Nature に掲載されることも珍しいことではなくなった。

しかし学術という大きな枠組みから見ると，全く違う光景が現れる。学振特別研究員の審査では，社会心理学は融合脳科学と同じ審査セットに配置され，心理学の外と競争する環境が出現した。科研費はまだ社会心理学という枠内での競争によって決まっているようだが，領域間競争に基づくシステムへ移行する可能性は否定できない。COE/GCOE のような領域間ガチンコ一本勝負が繰り広げられる世界で，社会心理学者を名乗る PI がどれだけ誕生することだろうか。問題は科学行政に限定されない。再現可能性問題の震源地である社会心理学に対して，ある種の暗い視線が生まれたことは間違いない。学問領域を隔てる壁は，こちらが望まずとも外側から勝手に突き崩される。向こうからこちらに向かって倒れてきた瓦礫に押しつぶされることなく，生き延びていくことは容易ではない。動物心理学研究に掲載された心理学者と神経科学者の対話は，自らの意志に関わりなく，外部から否応なく壁を切り崩される世界に生きることの厳しさを物語っている。

社会心理学はどこへ向かうべきか。それは決して終わった問いではない。だがかつてのように頭から湯気を立て「皆が進むべき道」を学会で議論しても役に立たないだろう。結局，サバイバルとは個人の問題であり，他者が生き延びたとしても，それによって自分が生き残れるとは限らない。何よりも外の世界を知らずに内部で議論するだけで，どうして新しい世界を生き延びていくことができるだろう。

新規事業委員会の役割は，2 年前に村田会長が宣言した目標，すなわち，現実社会への貢献ではなく，外部の知的世界に対する貢献を以ってして敬意を抱かれる研究，それを目指す若手を育む仕掛け作りにある。第 2 期新規事業委員会でも，基本的に第 1 期の企画形式を踏襲する予定である。そして社会心理学の中に留まり，JPSP や Psychological Science を読んでいるだけでは知ることができない外の世界，そこで活躍する人々，彼らの活気に溢れたスピード感，そうしたものに触れ，興奮する場を提供したい。その結果，彼我の差を思い知らされ，打ちひしがれる参加者も出てくるだろう。だが焼け野原に芽生える若葉こそ，いまの日本社会心理学会に必要な人材だと，私は信じる。

（たけざわ　まさのり・北海道大学）

第 2 回春の方法論セミナー「GLMM が切り開く新たな統計の世界」

新規事業委員会企画による第 2 回春の方法論セミナーは，2015 年 3 月 25 日に上智大学で開催されました。Ustream によるオンライン中継も行われ，会場には 200 名弱のご参加，中継は 300 件以上の視聴があり，大変に盛会でした。準備に関わったすべての皆様，とくに樋口匡貴さんをはじめとする上智大学の現地スタッフの方々に心から感謝申し上げます。現在も Web サイトから資料参照と動画視聴が可能です。ご活用下さい。

新規事業委員からのメッセージ

参加された方の中には「高尾山へハイキングに行くつもりで参加したら，いつの間にかエベレストの麓にいて，酸素マスクの使い方や，ベースキャンプから頂上へ至る道について説明を受けていた」といった感想を持った方もいらっしゃるようです。セミナー講師の久保先生と打ち合わせをした際，遠慮せずに上級者向けの内容まで一気に駆け抜け，全体像を伝えて欲しいと依頼したからでしょう。ただ個人的な体験から言えば，実用上は階層ベイズというエベレストにまで分け入らずとも良く，その前にある富士山くらいの山まで登れば，十分に日々の分析に利用できます。また，セミナー講師でもある清水裕士は，SAS で簡便かつ直感的に GLMM を利用するための補助ツールをセミナー終了後に開発し，無料配布しています。ぜひ，新しい世界にチャレンジしてみてください。思っているよりも簡単なはずです。

参加記：GLMM は社会心理学に新たな楽園を切り開くか？

池田功毅

僕が GLMM という統計手法を始めて知ったのはもう 10 年ほど前です。先輩の沓掛さん（現総研大・先導科学）に修士論文の指導をしてもらっている時でした。沓掛さんを含め，当時いた研究室の半数の方々は動物行動学/行動生態学がご専門で，みなさん統計に詳しく，書棚に並ぶ分厚い書籍の群れを見て，「これ全部統計スか…」と，軽くない絶望感を味わったのをよく覚えています。GLMM の名もその時お伺いしたのですが，結局教科書を読む途中で挫折，修士論文は変数変換と無理矢理な ANOVA で何とか乗り切りました[1]。その後も研究室で心理系実験データを発表するたび，生態学系先輩方からは「心理は ANOVA 地獄だよねぇ」的なコメントをいただき，「心理は計画的な実験やるので，GLMM なんて必要ないんっスよ…」と気弱に答えるばかりでした。

しかしその後も時折 GLMM の話が出るわけです。例えば心理言語学では，実験刺激となる文章や単語といったアイテム特有の効果が強いと考えられるので，参加者の個人差と同様にランダム効果として検討する必要があるとのこと。僕は「そうなんスねー。心理言語大変スねー」などと表向きは他人事を装っていたわけですが，条件毎に異なる顔写真を用いて実験を行なっていた（いる）僕には，考えてみれば無視して良い話では当然なく[2]，「本当は君も GLMM 使うべきでは？」と話を振られないかと，内心ヒヤヒヤしておりました。以来 GLMM をちゃんと理解していないといつかヤラれる（誰に？査読者に？査読者が？）と思いつつ，実際は ANOVA 地獄どころか，楽園のような暖かいまどろみに絡め取られたまま，今日を迎えたというわけです。

さてそんな 2015 年春に届いた『社心春の方法論セミナー：GLMM が切り開く新たな統計の世界』のお知らせ。 当然ながら，院生時代の挫折感を反芻しつつ，「どうせ数時間で分かるわけもなし…」などと軽い/暗い気持ちで上智大学に足を運びました。

そして僕の期待は見事に裏切られるわけです。もちろん良い方向に。

まず会場に入って[3]驚いたのはその盛況さ。数百人は入る教室だったと思うのですが，席が足りずに立ち見が出るほど。その熱意は年度末予算消化の為だけとはとても思えず，きっと僕と同じように，みなさん GLMM は気になりつつも，絶望を払拭する機会を探してらしたのかと推測しました。だとすれば，多くの方が来て正解だったと同意してくださるに違いありません[4]。

---

[1] その後投稿論文の段階では沓掛さんにばっちり GLMM で修正していただきましたが。

[2] この話はセミナーでも竹澤さんが触れてらっしゃいました。社会・認知心理学におけるこの問題は Judd, Westfall, & Kenny (2012). *J. Pers. Soc. Psychol.*あるいは Murayama et al. (2014). *J. Exp. Psychol. LMC* などが詳しいかと。後者は竹澤さんがトーク中で紹介されていたもの。

[3] 当日予定されていた会場でトラブルがあり，急遽会場の変更があったとのこと。にも関わらず非常にスムースな運営をされた新規事業委員の方々並びに上智の樋口さん，本当にありがとうございました。

[4] 当日会場に来れなかった方も録画＆資料が web に upload されているので安心です！

セミナーは竹澤さん（北大・社会心理）の導入トークからスタート。「反復測定デザイン」+「ロジスティック回帰」が必要と思えるデータを前にして，実はそんな組み合わせはどの本にも載ってないことに気づき，試行錯誤するうちに GLMM に出会われた，という体験談を交えた，良い導入だったと思います。

そして，おそらく本セミナーのハイライトは次の久保さん（北大・地球環境）のお話でした。まさしく「サルでも分かる GLMM：超速習編」といった感じで，具体的なデータ事例を挙げ，それを何度も繰り返し説明し，さらに次々に出てくる数式の特性を理解させるために，とにかく図にする！図にする！！ 図にする！！！の連続で，これは人間という視覚的動物（のうちの凡庸下位個体）である僕には，非常に効果的な伝達方法でした。これらテクニックを用いながら，GLM での様々な分布とリンク関数を次々に解説，さらに〈固定効果 ＝ データをグローバルに説明する効果〉&〈ランダム効果 ＝ データのローカル部分を説明する効果〉などの分かりやすい解釈を交えながら GLMM へ，そして階層的ベイズ推定から MCMC へと一挙に連れていかれてしまいました。ご著作[5]を読むより分かりやすかった！という意見もあったので，是非今夏の録画映像を編集して web に up されて，ご著作のサポートにされても良いのでは？と思います。

その後を受けて，清水さん（この 4 月から関学・社会学）によるトーク。内容は久保さんのトークで出てきた各ポイントのおさらいから始まり，社会心理学でよく生じる問題をどうやって GLMM で解決できるかを，具体的で分かりやすい二値，カウント，比率，多値カテゴリカルなどのデータセット例を交えながら解説。また具体的にどういう統計ソフトを用いれば良いかなどのアドバイスもあり，これまた大変参考になるお話でした。

で，最後に，じゃあ今後僕が GLMM を使うかどうかの正直な意見も書いておこうと思います。次の各点は完全に納得がいったので，今後そういう場面に出会ったら，是非 GLMM に挑戦しようと思います。(1) 変数変換などせず，変数の性質に従った分布を使った統計をかけるべき。(2) それら様々な分布と参加者内効果を同時に見るようなデザインは GLMM で対処すべき。(3) 参加者に加えてグループなどのネスト構造がある調査データ等では各要因すべてを変数効果として扱うべき。ですが他方で，では心理学全体が全面的に GLMM へシフトする必要があるのか？となると，実は僕のような認知寄りの実験屋は少し微妙です。平均反応時間などは正規分布の仮定が採りやすくデザインも単純。また例えば条件別に異なる刺激アイテムを用いていても，事前によく統制してある場合は，ランダム効果として入れる必要はないようにも思います[6]。もうひとつの疑問は再現性の問題なのですが，GLMM でどの要因をランダム効果として放り込むかという点などでの，いわゆる「研究者の自由度」はどうなるのか？という疑問が残っている気がします[7]。

しかしそんな偉そうなコメントを言えるようになったのも，GLMM について多少なりともまともな理解ができたという感触を，このセミナーで得ることができたからです。GLMM の楽園への道筋は教えて頂けたので，後は個々人の（僕の，です。すいません）やる気次第ということですね。ともかく勉強になりました。ありがとうございました！

（いけだ　こうき・中京大学）

---

[5] 久保拓弥『データ解析のための統計モデリング入門』岩波書店；表紙の色から通称「みどり本」

[6] この点，例えば心理言語で使う文章や単語は，統制不可能な「隠れ交絡要因」（？）が多く，予測できないアイテム効果が出てしまうのかもしれません。逆に，例えば顔表情写真刺激などは通常よく統制されていると思いますが，それでもアイテム間の分散がどの程度かを確認した方が良いのは事実（了解…）。条件ごとに異なる人種や，顔印象などを基準にして異なる顔写真を用いる場合なども（ヤバい…）一度 GLMM で確認すべきかと（了解ス…）。詳しくは脚注 2 の論文を参照。

[7] e.g. 平石，池田．心理学な心理学研究- Questionable Research Practice. 心理学ワールド. 68.

****

大会運営委員会からのお知らせ（第 57 回大会開催地・日程決定）

日時：2016 年 9 月 17 日（土），18 日（日）
場所：関西学院大学上ケ原キャンパス（兵庫県西宮市）
大会委員長：三浦麻子（関西学院大学）

開催校より：

2016 年度の大会を関西学院大学で開催することになりました。2005 年以来の，また第 1 回大会からかぞえて 6 回目となります。多くの社会心理学研究者が集う「コロシアム」で濃密な 2 日間を過ごしていただけるよう，様々な企画を検討中です。ご期待下さい。

会員異動（2015 年 3 月 21 日～6 月 19 日）

入会

《正会員》

・一般会員

金敷大之（甲子園大学心理学部准教授），小谷　恵（カルピス株式会社発酵応用研究所），小西ひとみ（一般社団法人セルフ・エスティーム研究所理事），佐藤賢輔（共愛学園前橋国際大学国際社会学部），下島裕美（杏林大学保健学部准教授），高木幸子（東京女子大学大学院人間科学研究科研究員），奈田哲也（京都橘大学助教），野中浩一（心理カウンセラー有限責任事業組合　Cocono），深谷博子（中京学院大学専任講師），宮脇　健（日本大学総合科学研究所講師）

・大学院生

安宅佐智世（徳島文理大学大学院人間生活学研究科），安随友和（追手門学院大学大学院経営学研究科），池間愛梨（東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻），伊藤洋輔（広島大学大学院教育学研究科），打田篤彦（京都大学大学院人間・環境学研究科），江口周作（帝塚山大学大学院心理科学研究科），大谷みちる（大阪市立大学大学院文学研究科），大谷友希絵（法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻），小城武彦（東京大学大学院経済学研究科経営専攻），乙訓智世（東京女子大学大学院人間科学研究科），笠原伊織（東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学研究室），草野広大（San Francisco State University），沓澤　岳（東洋大学大学院社会学研究科），齋藤誠子（慶應義塾大学大学院社会学研究科），坂井絵里香（東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻），坂本倫子（法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻），佐藤栄晃（関西大学大学院心理学研究科社会心理学専攻），静間健人（関西大学社会安全研究科），周ペイチェン（一橋大学大学院社会学研究科），砂川　愛（駿河台大学大学院心理学研究科），宋　佳（筑波大学大学院人間総合科学研究科），大工泰裕（大阪大学大学院人間科学研究科），高野裕介（慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻），竹内穂乃佳（大阪大学大学院人間科学研究科），田坂英恵（関西大学大学院心理学研究科），田崎優里（広島大学大学院教育学研究科），田中友理（名古屋大学大学院環境学研究科），谷辺哲史（東京大学大学院人文社会系研究科），鶴田　智（大阪大学大学院人間科学研究科），戸谷彰宏（広島大学大学院教育学研究科），中井彩香（首都大学東京大学院人間科学研究科），中尾　元（京都大学大学院人間・環境学研究科），中島英里香（愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科），長濱憲（東京大学大学院学際情報学府），野崎優樹（京都大学大学院教育学研究科），朴ゴウン（一橋大学大学院社会学研究科），羽倉英美（東京大学大学院教育学研究科教育心理学コース），福留広大（広島大学大学院教育学研究科），堀川佑惟（日本大学大学院文学研究科），水野君平（北海道大学大学院教育学院教育心理学講座），宮武沙苗（上智大学大学院総合人間科学研究科心理学専攻），武藤杏里（早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻），村上　始（早稲田大学大学院文学研究科），森川健太（首都大学東京大学院人文科学研究科），八野井　彰（首都大学東京大学院人文科学研究科心理学分野），山岡明奈（筑波大学大学院人間総合科学研究科），山本晶友（上智大学大学院総合人間科学研究科），吉田　翔（大阪大学大学院人間科学研究科），吉野太基（東京大学大学院人文社会系研究科），和田万里子（日本大学大学院文学研究科心理学専攻），和田義則（広島大学大学院教育学研究科），渡邉和弥（立正大学大学院心理学研究科対人・社会心理学専攻）

退会

青山明日香，赤羽　光，安達智子，足立知子，市川寛子，宇野善尋（物故），呉　正培，大石和男，大塚泰正，大平章子，大森弘子，大吉健洋，岡元陽一，奥西有理，小熊　均，加藤道代，加村圭史朗，來嶋和美，久保昌平，坂元　桂，清水　徇，白浜喜恵子，杉山憲司，陳テイテイ，野口聡一，浜井盟子，早矢仕彩子，原　由美子，福田詩織，藤原武弘，船越理沙，本間　修，真島真里，町田奈緒子，松木修平，松村惠子，間々田和彦，三好　力，村瀬英子，藪垣　将，山田雅敏，湯浅将英，吉本佐雅子，米村恵子，渡辺純子，渡部昌平

所属変更

石井　滋（行動科学研究所代表），菅原育子（東京大学高齢社会総合研究機構特任講師），小杉素子（静岡大学大学院総合科学技術研究科），藤田正美（台東区立平成小学校），向田久美子（放送大学），菊島正浩（開智国際大学），鈴木文月（田園調布学園大学非常勤講師），辻　幸恵（神戸学院大学経営学部経営学科），梶間幹男（岐阜刑務所処遇部企画部門統括矯正処遇官（分類担当）），石田米和（YK コーポレーション株式会社代表取締役），平石　界（慶應義塾大学文学部准教授），太幡直也（愛知学院大学総合政策学部准教授），橋本京子（京都学園大学健康医療学部言語聴覚学科嘱託講師），池田　満（南山大学人文学部心理人間学科講師），岡田陽介（立教大学社会学部メディア社会学科助教），埴田健司（追手門学院大学心理学部特任助教），上出寛子（東北大学電気通信研究所），清水裕士（関西学院大学社会学部准教授），佐藤史緒（東洋大学人間科学総合研究所奨励研究員），中島　誠（名古屋学院大学現代社会学部准教授），佐野予理子（関東学院大学），尾関美喜（東京国際大学専任講師），薊　理津子（江戸川大学講師），三船恒裕（高知工科大学経済・マネジメント学群講師），相羽美幸（東洋学園大学専任講師），塩谷尚正（京都橘大学健康科学部），澤海崇文（神奈川大学人間科学部非常勤講師），玉宮義之（獨協大学法学部），引地博之（Harvard T. H. Chan School of Public Health），橋本博文（安田女子大学心理学部心理学科），小澤拓大（宮崎学園短期大学保育科講師），中原

純（聖学院大学人間福祉学部准教授），坪井　翔（株式会社応用社会心理学研究所研究員），范　知善（Google Japan），高森順子（阪神大震災を記録しつづける会事務局長），宮本　匠（兵庫県立大学防災教育研究センター専任講師），高本真寛（（独）労働安全衛生総合研究所客員研究員），諏澤宏恵（京都光華女子大学看護学科講師），井川純一（広島文化学園大学講師），後藤崇志（京都大学高等教育研究開発推進センター特定助教），鬼頭美江（明治学院大学社会学部社会学科専任講師），池田安世（特定非営利活動法人育て上げネット中部虹の会），鈴木　真（関西福祉科学大学社会福祉学部社会福祉学科准教授），パク　ジュナ（名古屋商科大学助教），小川祐樹（立命館大学），須藤竜之介（九州大学大学院一貫制博士課程），林　祥平（明治学院大学），中山真孝（京都大学こころの未来研究センター・教育学研究科研究員），亀川勇太（長野県警察本部科学捜査研究所技師），平間一樹（科学警察研究所犯罪行動科学部捜査支援研究室研究員），鉄川大健（岡山大学大学院社会文化科学研究科），岩野温子（株式会社メッツ研究所　環境計画室），松田与理子（桜美林大学准教授），栗田聡子（三重大学国際交流センター），星野崇宏（慶應義塾大学経済学部・大学院経済学研究科教授）

『社会心理学研究』掲載予定論文（2015 年 6 月 21 日掲載決定分）

第 31 巻第 1 号（2015 年 8 月刊行予定）

《原著》

尾関美喜・米澤香那子・根ヶ山光一 「できごとの頻度・危険度とそれに対する集団のレジリエンス」

石井国雄・沼崎誠 「男女カテゴリの顕現性が自己価値への脅威下におけるジェンダーに関する自動的偏見に及ぼす効果」

橋本剛 「貢献感と援助要請の関連に及ぼす互恵性規範の増幅効果」

《モノグラフ》

渡辺匠・太田紘史・唐沢かおり 「自由意志信念に関する実証研究のこれまでとこれから：哲学理論と実験哲学、社会心理学からの知見」

第 31 巻第 2 号（2015 年 11 月刊行予定）

《原著》

大高瑞郁・唐沢かおり 「成人形成期の子どもの父親に対する態度を規定する要因：父親からの行動に関する子どもの認知に着目して」

岩谷舟真・村本由紀子 「多元的無知の先行因とその帰結：個人の認知・行動的側面の実験的検討」

《資料》

江利川滋・山田一成 「Web 調査の回答形式の違いが結果に及ぼす影響―複数回答形式と個別強制選択形式の比較―」

三浦麻子・小林哲郎 「オンライン調査モニタの Satisfice はいかに実証的知見を毀損するか」

三船恒裕・山岸俊男 「内集団ひいきと評価不安傾向との関連：評判維持仮説に基づく相関研究」

大坪庸介・山浦一保・八木彩乃 「日本語版和解傾向尺度の作成：日本語版赦し傾向尺度と日本語版謝罪傾向尺度」

第 31 巻第 3 号（2016 年 3 月刊行予定）

《原著》

山本真菜・岡隆 「ステレオタイプ抑制による逆説的効果の個人差：認知的複雑性との関係」

お知らせ

『社会心理学研究』は，これまで国立情報学研究所(NII)の CiNii（NII 学術情報ナビゲータ）を利用して電子アーカイブの公開を行ってきましたが，2015 年 4 月より科学技術振興機構(JST)の J-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）による電子ジャーナル化を実現しました。HTML 版と PDF 版で論文が掲載されております。どうぞご活用下さい。なお，著作権規程（第 5 条）に抵触しない範囲で，著者の皆様がご自身あるいは所属機関 Web サイト等にて PDF を公開していただくことが可能ですし，公開された PDF や HTML へのリンクは，もちろんどなたも妨げられるものではありません。

****

編集後記

第 28 期広報委員会体制となって初めての会報をお届けします。200 号以来，会報の原稿依頼から編集・刊行までを実質的に統轄していたのですが，自身が担当常任理事としての刊行となると感慨…は別になく，ただなんとなく荷が重くなったような気はします。重い荷物と面白い研究はなるべくいろんな人と分かち合いたいので，「あいさつ」で述べたとおり次号からは各広報委員責任編集の「特集」コンテンツを設けることで負荷の分散を図ることにしました。次号は清水裕士さん担当です。乞うご期待。ていうか，私が期待。（三浦麻子）